

## 〈巻頭言〉

## 大学院教育雑感

小林 隆 児

本学に職を得てはや9ヶ月が過ぎ去ろうとしている。新しい職場に適應することは年齢とともにかなりのエネルギーを要するものと実感している。それでもこれまで属していた福祉領域に比べると、心理臨床領域は私自身にとってより馴染みやすいものであるゆえか、結構楽しみながら学生の教育に取り組んでいる。

隔週開講されている夕方からの院生向けのゼミで、受け持っている子どものセッションの報告をある院生が行っている。その女子学生は昨今注目を集めている乳幼児精神保健領域に関心を持っていて、情動調律とか情緒応答性といった概念に随分惹かれていた様子であった。そんな彼女が毎回報告するセッションの内容を聞いていて、子どもの様子をどのように捉えたらよいのか、かなり困惑している様子であった。そのことが彼女の報告するレポートにもよく反映していた。それは以下のようなことであった。

子どもは今日風にいえば高機能広汎性発達障害といわれそうな状態を示していたが、確かに子どもと学生との間でどこかゆったりできない気の張りつめたような緊張が感じられる内容であった。ではどのような難しい関係がそこに生まれているのか、そのことを明らかにするのがまずもって必要なことなのだが、学生の報告するレポートの記述には、それを解くためにはなにが大切なのか分からない様子だった。当初はふたりの間に「・・・どこか緊張が感じられた」といい、最近では「・・・身体接触が増えてきた」などと大まかな変化は述べられているが、その関係の中

で実際起こっている機微についてはこちらにはよく伝わらない報告であった。しかし、口頭での報告を聞いていると、かなり細やかなところまで感じ取っているにもかかわらず、それが書かれた報告内容には反映されていないのである。学生が手短かにまとめて報告しようとしたためであるということもあろうとは思いますが、まとめるにしてもそこにはその人の価値観が反映しているものである。自分が体験したことの何がどのように大切なのか、そのことを切り取ることがまとめるという作業だからである。そこには学生が日頃どのようなことに着目しているかが示されているといつてよい。端的に言えば、学生の報告は行動記述を中心に行われていたのである。ただここで強調しておかなければならないのは、けっしてこの学生の出来不出来を述べようと思つてこのことを取り上げたのではなく、このような報告こそ大切であると今日でもなお真顔で主張する人も少なくないと思うからである。

そこで私は学生に以下のように助言した。  
 「身体接触」と一言で言うけれども、身体接触にもいろいろあるだろう。たとえば、ある男性が突然唐突に手を出して自分の手を握ろうとするのも「身体接触」、さり気なくまるで偶然のようにして手を触れるのも「身体接触」である。しかし、両者では「身体接触」の意味内容がまるっきり異なることは容易に理解できよう。結果のみ示すのであれば、行動次元で「身体接触」と表現すればそれで済むかもしれないが、両者でのプロセスはまったく異なっている。つまりは関係の質の相違

である。それはある意味では力動感 vitality affects の違いといってもいいものである。

なぜ私がそのようなことを強調したかといえば、このような力動感の違いは、当事者つまりは彼と彼女の気持ちの動きそのものを容易に想像させるものでもあるからである。そこで体験する彼と彼女は、「身体接触」という関わりの中で、互いに相手の身体の動きを感じるとともに、相手の気持ちの動きをも同時に感じ取っている。このようなことが可能になるのは、そもそも人間の身体や情動が両者間で共振あるいは共鳴するという機能を有しているからである。彼の身体と気持ちの動きを彼女は自らの身体を通して感じ取っているし、彼も同じように感じ取っている。ここで感じ取られる互いの気持ちの動きはその人の「いま、ここで」の生き様そのものだといってよい。だからこそそのような微妙な動きを丁寧に感じ取った上でその内容を記録に留めることが必要だと思うのである。心理臨床という実践は、このように当事者双方のこのころの動きをきちんと把握せずして成り立つはずはないと思うからである。

私たちがクライアントの気持ちをどのようにして感じ取るか、このことは面接において日ごろ誰もがもっとも苦労しているところである。その際、ややもするとクライアントの語ることばの内容にこころを奪われ、字面ばかりを懇切丁寧に拾うような記録をとりかねない。なぜなら日ごろ私たちはことばに重きを置いたコミュニケーションを取っていると思っ  
ているからである。デジタル情報化社会になってこのような傾向にますます拍車が掛かっている。

ここで取り上げた内容は、ふたりの関わり合いの中で起こっている些細でほんの一瞬の出来事であるが、そこに子どものこのころのありようは端的に表れているのであって、このような出来事をひとつひとつ丁寧に積み重ねることによって初めて、子どものこころを理解するための道が切り拓かれてゆくのだと思

う。

この学生が関心を抱いている情動調律につなげていけば、まさにこのような関わり合いの中にその重要性が示されているといっ  
てよい。なぜなら情動の働きがこのような関わり合いでの体験の意味を分かち合うことを可能にしてくれるからである。相手の身体の動きを感じ取るということは、私たちが自らの身体でもってしか感じ取ることはできず、かつそのことによって単に身体の動きのみならず、そこでは情動も同時に動き、私たちの情動をも共振する。このことによって、私たちは相手の気持ちの動きを感じ取ることが可能になっていくからである。このような響き合う関係を可能にしているのが情動調律とい  
ころの働きだともいうことができる。私の依って立つ「関係発達臨床」の最も重要なところは、まさにこのことにあるといっ  
てよい。自らの身体を通して相手のこのころの動きを感じ取ることができると、そしてそのような関わり合いを大切に  
して接近すること、このことが「関係発達臨床」の基本のキなのである。学生と過ごすゼミや講義での体験を通して、私自身の依って立つところが何か、そのことに改めて気づかされる。このような体験こそ教育（共育）という営みの醍醐味のひとつなのだと今実感しているところである。